

模擬授業研究会の斉藤メモ(2019年12月18日)

授業者：〇〇

範囲：私たちの生活と財政

主な感想・代案

- 気合のこもった雰囲気と、〇〇君の笑顔がうまくマッチしており、授業を受けやすい雰囲気がありました。
 - 導入と主発問の繋がりにピンとこなかった等の感想が見られましたが、私も「増税は必要か、不必要か」という問いを掲げるタイミングに唐突な印象を持ちました。ただ、これも感想に出ていたように、言葉のつながり一つで関連づけることはできるように思うので、今回はこの点については言及しません。
 - 〇〇君の授業は、「あえて」グループワークを持ち込んだ知識理解の授業をさせています。こういう考え方自体は理解はできます。情報を覚えるには、それを活用するタイミングや言語化する機会があった方がいい、討論はその手段であって目的ではない。こういう考え方自体はあり得ると思います。要は「頭の中で情報をつなげる機会」として、後半のグループワークを捉えている。その際に論点となりうるのは、「この討論で知識はつながるか？」だと思います。この際、「深まり」は度外視して話したいと思います。
 - そう考えた際に、〇〇君の授業の後半、特にワークシートの作り方や問いの出し方自体が「知識を繋げるサポート」が少ないように感じます。生徒に丸投げしている範囲がおおいのではないかと。
- ⇒ 私であれば、多少作業的になったとしても、学んだ税金の知識を活用するようなワークにしたいと思います。「どの税金であれば増やしても良いか、どの税金は増やしてはダメか？それはなぜか？」「直接税と間接税、どちらを増やすのに賛成か、それはなぜか？」など、ある程度項目を設けたうえで、書かせたり、述べさせるようにします。逆にこれらが述べられないということは分かっていないということなので、そこから、(討論というよりも)生徒同士の教え合いをするような時間にしても良いかもしれません。- このような代案を示す前提の理解として思うことを一点述べます。財政の話は、本来的には「増税か否か」という論点だけでは見えない軸がたくさんあります。極端な話、税金をたくさん払っていても、自分たちの生活が全部保障されていると感じれば、不満が出にくい場合もありうる。重要なのは、「どこで支払い、どう返ってくるのか。それに皆が納得できるのか。」という点が最大の論点だと思います。そう考えた時、〇〇君の授業では、増税・減税に話が焦点化されすぎており、直接税や間接税、さらに言えば、税負担をめぐる逆進性や公平性をめぐる論点を捉えきれない気がします。これは、思考判断の授業をした方が良いというわけではなく、知識理解だとしてもそう思います。
- 前半の穴埋めのワークに関しては、先週の研究会の後でやりづらい雰囲気を作り申し訳なかった。この点に触れるとすれば、やはり、授業での穴埋め作業は作業感が強かった気がします。もう少し、なぜポイントの明確化と(知識を得させつつも)考えさせる工夫をしたい。

⇒ 仮に私であれば、直接税と間接税の話をもずしてしまう気がします。そもそもなぜ二つの仕組みがないといけないのか？その上で、より細かい税の種類に関しては、名前を覚えるよりも、なぜそれぞれが直接税・間接税なのかを理解させる方が重要だと思う。そうすると、税のリストをワークシートにあげたうえで、教科書を見ずに、その税リストを直接・間接に分類させ、特定の税の種類ごとに担当のペアを作り、それぞれが、なぜ直接・間接が逆ではダメなのかを議論し発表してもらおう、という方法はあるかと思います。

【コラム】理論と実践の接点

この授業が「思考判断表現」なのか「知識理解」の授業なのかをめぐって、色々と意見が感想でも飛び交っていますが、評価観点については、「並行説」と「段階説」という考え方があり、並行説であれば、知識的なことを、思想的なことを並行して(切り離せない形で)学んでいるという考え方も可能です。この考え方であれば、大まかな比重の置き方はあると思いますが、必ずしも両者を区別する必要はなくなります。一方、段階説であれば、知識がないと思考できないという発想になります。この方が一般的には直観的理解とは近い形になりますが、知識理解のじゅぎょうにおける詰込み色が強くなります。あと、並行説は、四観点自体への懐疑的なスタンスも現れています。

【参考文献2】西岡加名恵他編(2015)『新しい教育評価入門』有斐閣